

連	載	
講	座	
第	8	回

犯人は地蔵さま?・板倉勝重

作家 童 門 冬 二

板倉勝重は徳川家康の家臣で信用が厚かった。家康は子どものころ、駿府(静岡市)の今川家の人質になっていたの、子どものときから苦勞した。そのとき、町の人びととの接触も多かったの、家康は、

「いずれ、自分が政治をおこなうようになったら民生を大切にしよう」と考えていた。天下人(征夷大將軍)になった後、家康は京都の民生に深い関心を持った。そこで幕府に新しく「京都所司代」というポストを設けた。皇室や京都朝廷との関係だけでなく、京都の市民生活にかかわりをもつ行政の責任者を兼ねる。だれがいいだろうと人選をした。しかし家康は「板倉勝重にしよう」と心を決めていた。勝重はすでに、家康が管理していた岡崎や駿府で町奉行をつとめ、住民の評判が大変よかったからである。京都所司代を命じた勝重に「なによりも心を配らなければならないのは京都の住民に対してである」と助言した。勝重は「お教えは胆に銘じます」と平伏した。

勝重が赴任してからしばらく経って、町で面白い事件が起こった。それは、ある町で反物商人がお地蔵さまの前で居眠りをしていたときに、反物を全部盗まれたことだ。犯人はまったくわからない。町では「お地蔵さまが盗んだのではないか?」といいはじめた。もちろん京都市民らしい冗談である。しかし勝重はこの冗談をまともな受けた。部下をその町にやっっているいろいろ調べさせた、なんの証拠もなく犯人は皆目見当がつかなかった。勝重は、

「町の住民が地蔵が犯人だといっているが、ほんとうかもしれない」

といった。そしてその町の責任者を呼び出し、

「町の住民が交替で地蔵を監視するように。また地蔵が盗みを働くと困るから」といった。

町役人はびっくりした。しかし所司代のいうことなので拒むわけにはいかない。町では交替でお地蔵さまを監視することになった。迷惑な話だ。交替に動員される住民は、仕事ができない。しだいに、このお地蔵さまの監視が負担になってきた。そこで町ではみんなが集まって相談した。

「こんなことをいつまでつづけていたのでは、商売ができない」

「商売ができなければ町の元気がなくなり、やがては町がほろびてしまう」

「なんとかしなければ、あのお地蔵さまのためにわれわれが倒産してしまう」

などいろいろな意見が出た。考えた挙句ある住民がこんなことをいった。

「もともとは、反物商人が居眠りをしていたときに、その反物が盗まれたのでこういうことに

なったのだ。いっそのこと、われわれでその商人に反物を弁償したらどうだろうか?」

この案にみんながとびついた。それはいいということで、それぞれの家から反物を一反ずつさし出すことにした。所司代の板倉にこのことをいうと、

「それは妙案だな。よし、そのとおりに実行してくれ」と許可を与えた。反物が山と積まれた。しかし所司代の板倉はすぐその反物を盗まれた商人には返さなかった。商人を呼んでこういった。

「この中に、おまえの盗まれた反物があるかどうか調べてみろ」

商人は、血眼になって反物を調べた。やがて、

「ありました1」

と声をあげた。そして一反の反物を持って板倉のところに持ってきた。

「これがわたくしが盗まれた反物でございます」

「わかった」

そこで今度は、板倉は町役人を呼び出してその反物を示した。

「この反物をさし出した者を役所にごさせろ」

町役人は板倉がなにをいっているのかすぐ理解した。ああそうだったのかと思った。町に戻り、その反物をさし出した人間を連れてきた。板倉はその人間にニコニコ笑いながらこういった。

「バカだな、おまえは。なにもバカ正直に自分が盗んだ反物を出さなくともいいものを。

金を出してほかの反物を買って混ぜておけばわからなかったのに。おまえは反物を盗んだ割合には頭が悪いな」

そうからかった。反物を盗んだ犯人は恐縮した。板倉はこういった。

「盗んだ反物はまだ残っているのか?」

「はい。一旦反物を盗みはしましたが怖くてほかに売ることはできませんでした。そっくりそのまま残っております」

「わかった。それではそれを全部返せ」

板倉は犯人から反物を全部受け取り、商人に返した。もし、盗んだものが一反でも転売しているようなことがあればゆるすつもりはなかった。しかし、自分が犯した罪におののいて盗んだものもそっくりと保存しているときいたので、板倉はゆるす気になったのである。町役人だけにこのことを話し、

「ほかの者には話すな」

と釘をさした。そして町の間人たちには、

「おまえたちの町の地蔵さまはなかなか正直だ。昨夜、わしのところに盗んだ反物を全部返しにきた」

と笑いながらいって、

「この件は落着である」

と宣言した。薄々事情を知っていた町の住民たちはみんな顔をみあわせた。そして、「所司代様は、なかなか人間味のあるお方だ。これなら、われわれ京都の間人も安心しておつき合いできる」

といい合った。家康の人選は成功したのである。